

第4回「海の京都実践会議」結果概要

- 1 日時 平成26年4月18日(金) 13時30分～15時30分
- 2 場所 ホテル ルビノ京都堀川 2階 「加茂の間」
- 3 主な内容

＜海の京都(各市町、各分野等)に係る取組状況と今後の方向性について＞

「海の京都」取組状況 総括 (京都府から説明)

- 海の京都エリア内の全7市町でマスタープランが策定された。
- 海の京都観光圏に関する取組みについて、海の京都エリアで活躍する7名が観光庁のワークショップ等を受講し、観光地域づくりマネージャー認定を受けた。あわせて、観光圏ワークショップを実施中。その成果として、宮津市の文殊・府中と伊根町でモニターツアーを行った。
- 府事業「海の京都観光関連施設修景支援補助金」について、平成25年度は観光関連施設11件で活用されており、少しずつ民間の投資が行われているところ。
- 「海の京都」ターゲットイヤーに向けた中核的プレイベント「海フェスタ京都」が7月19日～8月3日に開催される。舞鶴市が中心となり、関係市町が連携して進めている。国の協力を得て日本中で宣伝してもらえるので、これをどのくらい活かせるかが試されている。
- 全体として、行政事業が先行しており、民主導の事業の促進が課題。

各市町での取組状況 (京都府から説明)

■ 福知山市「お城とスイーツを巡るまちなか観光エリア」

- ・ 商業のまちであり、観光まちづくりの取組は難しい状況だが、「ほくと元気塾」(福知山市の若手経営者による異業種交流会)との意見交換などの動きが出始めている。
- ・ 「なぜスイーツなのか」「福知山城を訪れた人に何を感じてほしいのか」といったコンセプトのさらなる検討が必要。

■ 舞鶴市「舞鶴赤れんがパーク周辺一帯」+京都舞鶴港周辺

- ・ 舞鶴赤れんがパーク周辺については、行政によるハード整備は一段落しており、今後は民間投資を促していくことが必要。
- ・ 京都舞鶴港のクルーズ客船寄港について、平成26年度は14回を予定(平成25年度の2倍)。ただし、昨年度より寄港回数が大幅減少している船もあり、その理由は日本人からの評価がよくないためとのこと。レピュテーションを上げないと、次年度の寄港はゼロになってしまう。
京都府は京都舞鶴港旅客ターミナル施設を急ピッチで整備しており、舞鶴市は「京都舞鶴港クルーズ客船おもてなし関係者連絡会議」を設立した。クルーズ客船寄港を起爆剤に磨いていく必要がある。

■ 綾部市「ゲンゼから大本に至るまち並み」

- ・ 行政主導で進んでおり、住民の間であまり意識が浸透していないという課題がある。もともと、ものづくりのまちであり、観光まちづくりの取組は難しい状況だが、綾部青年会議所との定期的な意見交換を実施するなどの動きも出始めている。
- ・ 綾部市により、都市交流拠点施設(通称=あやべ特産館)が整備され、平成26年5月下旬オープン予定。地域特産品や農産物の直売、休憩コーナー、観光情報の提供等を実施する予定。ソフト事業の充実等が必要。

■ 宮津市「天橋立」(文殊から府中)

- ・ 宮津市は、駅前広場について天橋立を感じられる景観を整備予定。また、京都府は、府道を砂浜をイメージしたものに整備して予定。ライトアップについても、長町京都造形芸大客員教授にデザイン等をお願いして、夜も歩くことができるようにする。また、通りの店舗にも夜も開けてもらうように

していく。

- ・ 天橋立駅前の空き店舗対策として、天橋立繁栄会と地元の方が修景のルールを話し合い、「まちづくりの協定案」を4月中に策定予定。

■ 京丹後市「浜詰（夕日ヶ浦温泉）・久美浜エリア」

- ・ 地域のコンセプトや4地区（夕日ヶ浦、小天橋、久美浜一区、かぶと山）の連携・役割分担等の議論が課題であり、現在、4地区住民によるワークショップ等を開催し、踏み込んだコンセプトづくりを始めたところ。
- ・ 「夕日広場（仮称）」基本計画策定。小天橋海岸から浜詰海岸への遊歩道整備着手。

■ 伊根町「伊根浦地域内」（鳥屋地区を中心に整備）

- ・ 素晴らしい景観を楽しんだり、飲食をしたり土産物を買ったりする場所がないということで、交流施設を建設するため、鳥屋地区の空き地を伊根町が買収し、デザイン概略設計を業務委託したところ。
- ・ 民間の方が、交流施設予定地の近辺で空き家を買上げ、飲食・土産物屋として活用予定。

■ 与謝野町「昭和モダン・シルクの里もてなしゾーン」（核はちりめん街道エリア）

- ・ マスタープラン策定会議では、地元の方に非常に積極的に参画いただいた。
- ・ ちりめん街道については、修景がなかなか追いついていない状態。また、伊根町と同様で、レストラン等のお店がない。
- ・ 加悦鉄道の廃線跡について、線路を模した舗装整備や駅の看板を設置する等、自転車で走りながら旧加悦鉄道を思い起こさせる場所に整備予定。

各分野での取組状況

1) 回遊システムの整備

(京都府)

- 効率的・効果的に公共交通で移動できるような情報提供・移動環境・移動町環境を重視した回遊システムを整備することを目的に、京都大学大学院工学研究科低炭素都市圏政策ユニットの協力を得て、『「海の京都」回遊システム構築マスタープラン（案）』を作成。
お客様の利便性向上のため、地域パルスタイムテーブル化を図るべきとのご提案等をいただいている。また、各拠点の効率的なまわり方を示すオートスケジューラーを開発していく。
- このマスタープランについては、誰が実施していくのかということが大事になってくる。

(実践会議メンバーからの意見)

- 丹後海陸交通では、行楽シーズンの土日祝に、丹後半島周遊バス（仮称）を運行することを検討している。天橋立駅前を出発して、籠神社や伊根湾めぐり発着場等の観光スポットで停車して、網野駅等を終点として北近畿タンゴ鉄道と連絡する予定。バスは1時間ごとなので、観光スポットごとに1時間過ごしていただける仕組み。1日8便を予定。海フェスタ京都開催に間に合うよう開始したい。
- 昨年10月1日から、丹後全域上限200円バスを導入しており、観光のお客様にも分かりやすく利用しやすい料金となっている。丹後半島を周遊するという意味でも、北近畿タンゴ鉄道と連携して企画チケットができないか検討したい。
- 宮津～伊根航路を復活させる。観光シーズンの土日祝に1日1往復を予定。海フェスタ京都開催に間に合うよう開始したい。天橋立についてはオプションとして検討している。運航の時間帯は検討中。
- 「海の京都」事業にタイミングを合わせて、周遊バスや伊根航路の旅客船はもちろんのこと、スピードボート、ケーブルカー等当社の乗り物について、デザインを統一していきたい。そのデザインも、海の京都のコンセプトに沿うものとしていきたい。周遊バスについては、平日は路線バスとして地元の方にもご利用いただくため、身近に走るバスとして地元の方にもクリーンで楽しい雰囲気诉求するデザインとしたい。また、海の京都エリア外からエリア内へお客様をお連れする高速バスでは、丹後地域をアピールするため、天橋立や伊根の舟屋、ジオパークの立岩、ちりめん街道のイラストをラッピングし

たい。

- 伊根航路用に新しい船を建造中である。内装など、これまでの船と、ちょっと違った、楽しめる仕掛けを考えている。

(京都府)

- ぜひ、天橋立と伊根をつないでいただきたい。

(実践会議メンバーからの意見)

- 周遊バスについて、フルーツ街道を通ってかぶと山へ向かうことができるよう、もう少し伸ばせるとよいと思う。また、まちなかではなく、海岸線を通るルートとしてはどうか。

(実践会議メンバーからの意見)

- 海の航路について、1日ではなく、1泊2日のパスポートとした方が、より経済効果があると思う。

(京都府)

- 北近畿タンゴ鉄道について、上下分離による経営の抜本的改革を実施する。駅を中心としたまちづくりに民間の積極的な投資をいただけるのではないかと期待しているところ。
- 「くろまつ(仮称)」の運行について、平成26年度上半期スタートを目指して進めている。

2) 食・特産品開発

(京都府)

- 天橋立ミュージアム「ちえのわ館」に、13蔵のお勧めのお酒を1箇所を集めて試飲いただける交流拠点を整備する。天橋立駅を出ると「海の京都・地酒巡り」というサインが見えるようにする。13蔵のお勧めのお酒を500円で試飲していただく。お猪口には海の京都ロゴをあしらっている。
実施していく中で、へしこやオイルサーディン、地域の旬の食材をテイastingしていただく仕組みをつくりたい。丹後酒蔵ツーリズム運営委員会等、民の動きと連携して、海フェスタ京都開催に合わせてオープンしたい。また、地域の歴史や伝統もあわせて味わってもらふ拠点としたい。
- 「海の京都」酒蔵めぐりツアー(モニターツアー)を4月27日(日)に開催予定。

(実践会議メンバーからの意見)

- 現状では、車で来るお客様が多く、日帰りのお客様はお酒を飲むことができない。海の京都エリアは公共交通機関で回ることができるというアピールをもっとしていかないと、お酒の販売に結びついていかない。

(実践会議メンバーからの意見)

- 丹後に来ないと飲むことのできないお酒が多数あるし、旬のお酒というものもある。これらをお客様に味わっていただくためには、酒蔵を回遊できるバスや鉄道が重要。

(京都府)

- 海フェスタ京都において地元産農林水産物等を味わえるブースをつくるため、JAや漁協に協力を依頼しているところ。また、「伊根の漁協めし」や「舞鶴のかき小屋」が賑わっているが、このような資源の掘り起こしを行っていく。
- 海フェスタ京都においても、食が非常に重要と認識しているが、現状は食を味わうことのできる場所ができていない。舞鶴とれとれセンターが中心になるだろうが、人数が増えると処理できないと思うので、舞鶴市と連携して取り組んでいきたい。

3) 広域観光の推進

(京都府)

- 平成25年度はまだプロモーションの時期ではないとして抑えていたが、海フェスタ京都の開催等を

契機として、準備ができているところについては、そろそろ露出を上げていく。

- 現在配付している「海の京都パスポート 冬版」でも冬ならではの料理等を紹介しているが、これからは、クオリティが整っていないところは掲載しない、選ばれたお店のみに海の京都ロゴマークの使用を許可するという選別をかけていきたい。

<意見交換等>

(実践会議メンバーからの意見)

- 海の京都エリアの富裕層向けツアーを企画・実施したところ大好評だった。伊根の舟屋や酒蔵めぐり、海の幸は非常に魅力的なので、ピンポイントでターゲットにアピールすれば参加する人が必ずいると思う。コンテンツを的確にアピールすることが大切だと考える。
- 富裕層をターゲットにするならば、やはり東京がメインになると思うが、一番の課題は東京から丹後へのアクセス。伊丹空港から但馬空港を経由すると3時間くらいで来ることができる。ただし、但馬空港からの交通がないので、但馬空港の着陸時間にあわせて周遊バスが出ていると「飛行機で行くことのできるエリア」とアピールできるのではないかと。このとり但馬空港からは、土日だけでも京丹後方面へのシャトル便などがあつたほうが良い。(当方は実際にはレンタカーを予約。しかし、事前予約が必要。タクシーなどもなかった)

また、飛行機というアクセス方法があることが東京の人には認知されていないので、これをアピールするとよいと思う。

(実践会議メンバーからの意見)

- 中国人の京都熱は非常に強く、これを逃す手はない。中国人をターゲットに海の京都エリアに連れてくるという戦略も必要ではないか。また、観光客は、朝一番に市場に行きたがるので、京都市内のマルシェで丹後産の農林水産物を販売してはどうか。
- 京都市内で、音楽と花火のイベントを実施する予定だが、天橋立でも、花火のイベントを開催してはどうか。
- 最近は、まちなかよりも、不便な場所で開催される音楽イベントが人気。丹後あじわいの郷を音楽の聖地にしてはどうか。また、瀬戸内国際芸術祭等、アートでまちおこしをして成功している事例を参考にしてはどうか。
- 北近畿タンゴ鉄道は、トイレや駅舎が汚い。これはヨーロッパではあり得ないことで、こうした整備にもお金を使うことが大事。また、現状では、車内で時間をつぶせないで、婚活列車等を企画してはどうかとJRに提案中。

(京都府)

- スポンサーとお金を集めてぜひやっていただきたい。京都府も、場所の提供やトイレ整備の投資等支援するので、実施することのできる人材をご紹介いただきたい。

(実践会議メンバーからの意見)

- ブランド店が立ち並ぶ同じようなまちづくりが世界中で行われているが、美味しいお酒やワインを目的にわざわざ訪れるのが最近の傾向で、その土地特有の光るものが必要。ただ、それを達成するためには最低10年はかかる。食べる場所の整備ができていないところに来ていただいて、がっかりさせてはいけない。お客様を呼ぶには口宣伝が一番だが、地元の人とその気にならないと難しい。
- 久美浜にある小さなお寺で蝋燭能が行われているが、こうした他地域では行われていないような隠れた宝物がたくさんあると思う。このような自分なりの丹後を紹介していきたい。

(実践会議メンバーからの意見)

- 最近は、どこにいても同じものを食べることができてしまうので、それぞれのお店が、どのような出し方・食べさせ方・楽しませ方をするかを工夫しなければならない。特に、海沿いの地域では、生魚の作りを出したら美味しいと言う考えでは、本当の美味しさではない。生の魚をどのようにめ(殺して)

て、メてから何時間後に、どのように切って作ることが本当においしい作りとして、食べるのかといった落とし込み（料理をどのように食べて頂くか）が必要である。

- また、地元産でないものが出てくるのがよくある。これがお客さんがどんどん減っていく原因にもなっている。漁師さんや料理店が同じ思いに立って考えないと、やがてすべてを無くしてしまう。

(実践会議メンバーからの意見)

- ブリの地域消費量は3割くらいに落ち込んでいる。丹後に来ていただくためには、地域消費量を上げて、その地域でしか食べられないものを作ることが必要になると考えている。

(実践会議メンバーからの意見)

- ジャパンパスという、150～200ドルで30箇所程度行き放題のチケットをインターネットで買うことができる仕組みが動き出している。ITでの清算が可能になる中で、個性があれば売れる時代になった。旅行者にアピールする時にはタイトルが非常に大切。外国人観光客に対しては、もっと個性的で冒険心があって、美しいものはここにしかないというアピールをしていくことが大事。美しい写真等でアピールしていくことも重要である。
- また、多言語化を進める必要がある。多言語音声ガイド等、多言語化自体は技術的にそう難しくないが、興味を引く説明や台本を考えることが非常に重要。
- 自分の地域だけでなく、他地域を勧めあうことが不可欠。この時、具体的なお店の名前を挙げて勧めることができるようにする必要がある。

(京都府)

- 多言語化は行政の力で進められる部分もあると思うので検討したい。
- 他地域を勧めあうことの重要性についてはご意見の通りで、「海の京都」の重要なポイントになる。

(実践会議メンバーからの意見)

- デザインについては、7地域それぞれのバラエティについてどのようにバランスをとるか。特に交通については、広域的な統一感を出していくとよい。
- 京丹後市のマスタープランに、京料理（＝陸の京料理）に匹敵する「海の京料理（仮称）」の企画・開発とあるが、これは面白い。海フェスタ京都においても、魚だけを提供するのではなく、陸の京料理と海の京料理を対比させてこそ際だつのではないかと。

(実践会議メンバーからの意見)

- 舞鶴市では、着地型観光等のプランに、舞鶴市内のプランだけでなく他の市町を含むプランを入れて充実させている。舞鶴は天橋立等比べて集客力が弱い部分もあるが、イージス艦等見どころがたくさんあるので、他の地域でプランを作る際には、ぜひ舞鶴を入れていただきたい。

(実践会議メンバーからの意見)

- 福知山市は、いろいろな団体の代表等の参画によるワークショップが始まり、観光圏を作っていくという意識がようやく生まれつつあるという状況。
- 先日、海の京都事業福知山協議会のメンバーで、実際にまちなかを散策した。我々自身、知らないことが多く、感動することも多かった。もっと自信を持ってやっていかないといけないと感じているところ。お城とスイーツというコンセプトのもと、自分たちの力でひとつのものを作り上げていきたい。

(実践会議メンバーからの意見)

- 福知山市では少し取り組みが遅れていたが、福知山市内の方でさえ地元のことをよく知らないということもあるので、まずは地域のDNA、歴史や文化の積み重ねの中から産まれてきた地域の良いものや美味しいものに関するワークショップを実施し始めた。これがほんまものとして観光資源となる元であると思われる。
- 北近畿に1万6千人のホルダーがいるカードを運営しているが、サービスを提供するにあたって自分

のお店の自慢は何かを考える勉強会を開催しており、こうした取組とも連携していきたい。

(実践会議メンバーからの意見)

- 綾部市は田園風景が素晴らしく、由良川ともマッチしていて、自転車が走りやすい。現在、府が青いラインを引いているところだが、あやべ特産館に本格的な自転車30～50台を設置できないか、市長にお願いしているところ。京都駅からJRで来て、レンタサイクルで丹後半島を一周するシステムを作れたらよいのではないか。

(実践会議メンバーからの意見)

- 綾部市ではあやべ特産館が整備されるが、これは第一弾。特産館をコア施設にして、他の地域についてもサテライトということで整備を進めていきたい。
- 綾部市には日本の原風景があり、グンゼ等の歴史があるので、そういったものを感じられる案内の仕組みをつくりたい。また、少なくとも駅ではWi-Fiが使えるようにしていきたい。